



出土遺物



調査トレンチ

近長四ツ塚古墳群墳丘測量調査報告

1.はじめに

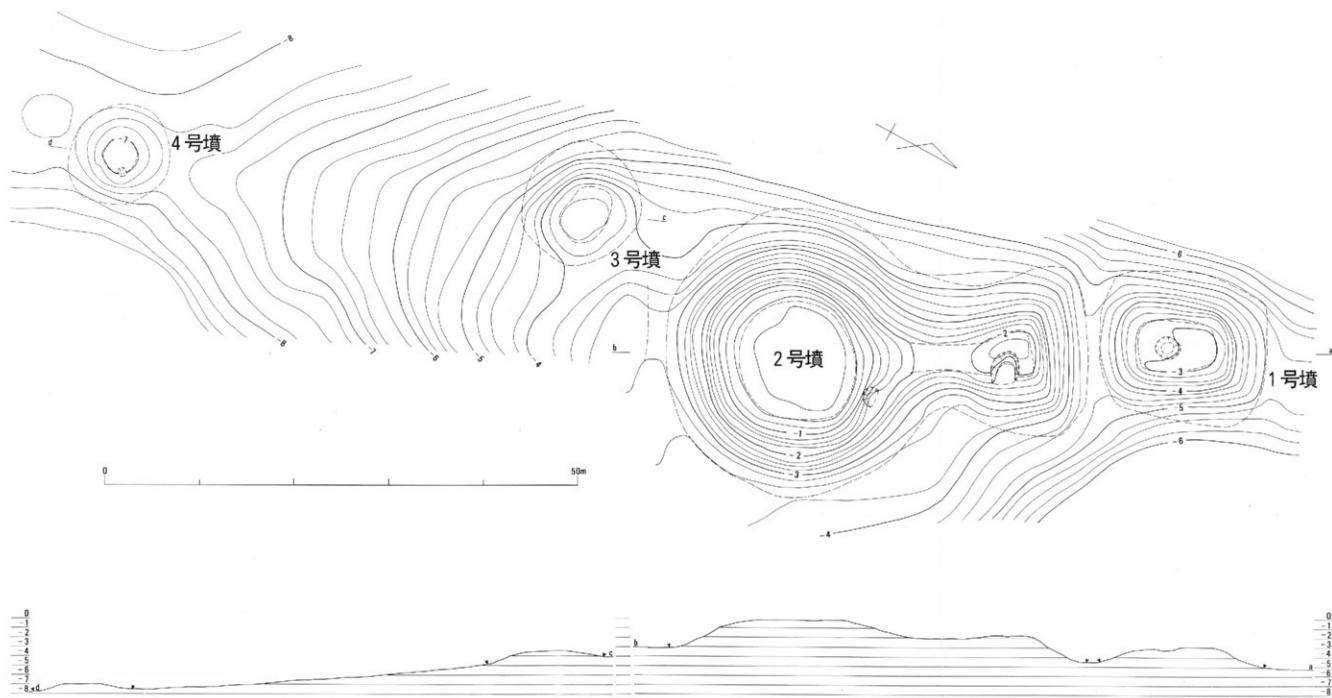
近長四ツ塚（ちかながよつづか）古墳群は、岡山県津市近長422、424番地に所在する。津市街地の東部、吉井川の支流加茂川左岸の丘陵上に立地し、前方後円墳1基、方墳1基、円墳2基の計4基で構成される。本流域には、日上天王山古墳（前方後円墳、55m、註1）、正仙塚古墳（前方後円墳、56m、註2）などの首長墳や井口車塚古墳（帆立て貝形、35m、註3）、飯塚古墳（円墳、35m、註4）、才ノ嶮古墳群（円墳4基、註5）、天満神社古墳群（円墳12基、註6）、河辺上原古墳群（円墳3基、註7）、日上歛山古墳群（円墳約60基、註8）など横穴式石室導入前の群集墳などが多数点在し、本流域が当時としては重要な地域であったことが伺える。今回の測量調査は、本古墳群の規模・位置関係などの概略を確認するための調査である。なお、本古墳群は現在市指定の史跡となっている。

2.測量調査（第2図）

測量調査は、平成4年3月25・27日にセンター職員（行田裕美、小郷利幸、平岡正宏）が中心となつておこなった。調査は開放トラバースを設定し、最高所を0として、-25cmセンターでおこなった。各古墳は丘陵の頂部稜線上に造られており、名称は北から1～4号墳と呼称している。なお方位は磁北である。



第1図 近長四ツ塚古墳群位置図 ($S = 1 : 50,000$)



第2図 近長四ツ塚古墳群墳丘測量図 (S = 1 : 400)

ある。

1号墳 1号墳は2号墳の前方部に接して平行に造られた方墳で、流上のため四隅のコーナー部分と東側の墳端が明瞭でないが、南北18m、東西16m程を測り、現状では長方形を呈するものと考えられる。高さは、東側で2.5m、南側で1.75mを測る。墳頂部には8.5×6m程の平坦面があり、ほぼ中央付近に直径2m、深さ0.4m程の深い擾乱穴が存在する。この擾乱穴の廃土内には石材などは見られないため、埋葬施設に關しては不明である。また、西側墳頂寄りの斜面には、河原石によるかなり密な葺石が露出している箇所がある。その他の所では葺石は確認していない。埴輪も見られず、出土遺物についても知られていない。

2号墳 1号墳の南側に接して存在する全長44.5m程の前方後円墳で、後円部径30m、高さ3~4.5m、前方部幅約20m、長さ16m、高さ2.5~3m、くびれ部幅12m、高さ1.5~2m、後円部と前方部との比高差は-1.5mである。1号墳とは接しており、周溝状に切り離されているものの、1.5m程しか離れていない。また、後円部の墳頂南東側には若干の高まりがあり、その間が明瞭ではないか深い周溝状を呈している。おそらくこの高まりは、埴丘整形時に丘陵から切り離した際の残丘部分であろう。よって、埴丘の大部分は盛土によって構築されているものと推測される。後円部墳頂には直径14m程の平坦面があり、この外周に沿って河原石による列石風の葺石が西側に見られ、さらに南側斜面でも部分的にかなり大きめの石を使用した葺石が確認できる。この平坦面には若干の凹凸はあるものの目立った擾乱穴は存在しない。また、段築は現段階では確認できない。前方部には頂部東側に4×3m、深さ0.9m程のかなり大きめ擾乱穴が存在する。この擾乱穴の廃土はかなり下方に掻き出されているが石材などは見られない。また流土のためか両コーナーの墳端は明瞭ではない。埴輪は確認されず、出土遺物についても知られていない。

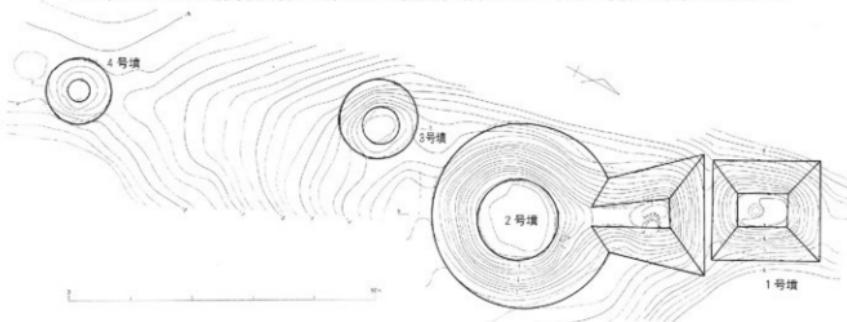
3号墳 2号墳の南7mに位置する直径13m、高さ0.5~2m程の円墳である。やや斜面に造られているため、山側と谷側では高さが大きく異なっている。墳頂平坦面は直径5m程、また、目立った擾乱穴は存在しない。葺石・埴輪なども確認されていない。

4号墳 3号墳の南37m、1~3号墳からかなり離れて単独で存在する。直径11m、高さ0.75~1.25mの円墳で稜線上に存在する。墳頂平坦面は直径4m程、中心からやや東側に直径1m、深さ0.3m程の擾乱穴が存在する。また、葺石・埴輪などは確認されていない。

3.まとめ

近長四ツ塚古墳群は、前方後円墳1基、方墳1基、円墳2基で構成されている。いずれも出土遺物が知られていないため、前後関係については定かではないが、明らかに1・2号墳には築造に關して一定の規画性が存在していたものと推測できる。第3図に古墳群の復元図がある。それによると1・2号墳の主軸はほぼ通り、1号墳の南辺と2号墳の前方部全面のラインが平行している。従来の見解では、両者の長さは同じとされていたが、測量の結果、1号墳の方がやや短くなる可能性がでてきた。いずれにせよ両者は同一の規画の元、相次いで築造されている。また、2号墳後円部の墳頂平坦面はやや東側によっている。この事は西側の平野部をかなり意識して埴丘を構築（例えば埴丘を大きく見せる）している可能性が大きい。次に円墳の3号墳は、2号墳とは主軸がずれ丘陵の稜線からやや下った斜面に築かれている。この事は前後関係は不明だが、両墳の埴丘構築にあたりかなりの制約があったものと考えられる。さらに4号墳は稜線上にはあるものの2号墳からは55mも離れている。そのためこれら3・4号墳については1・2号墳に明らかに伴うものかどうかは定かではない。しかし周辺に同様な円墳が他に

存在しない事などから、現時点ではある程度関係があるものと推測される。また、2号墳の埴丘の構造については、ほぼ同規模と推測される上横野小丸山古墳の後円部が2段に造られテラス部分があり、斜面には葺石が存在する（註9）。この古墳についても埴輪や副葬品も検出されていないため時期は不明だが、45mクラスの前方後円墳にも明らかに2段築成が存在するため、本2号墳にも現状では確認でき



第3図 近長四ツ塚古墳群復元図 (S = 1 : 800)



名 称	全長	後円部 径 高	前方部 幅 高	くびれ部 幅 高	後前高差	葺石	埋葬施設（副葬品）
近長四ツ塚2号	44.5	30 3~4.5	20 3	12 1.5	-1.5	有	?
赤塚	45	28 4.5	16 3.5	12 1.5	-1.6	有	後円部—木棺(鏡、鍔斧、手斧、刀子、勾玉、小玉、土師器) 前方部—壘穴式石棺(不明)

第4図 近長四ツ塚2号墳（左）と赤塚古墳（右、断面は破線）の埴丘比較 (S = 1 : 500)

ないが段築が存在する可能性も考えられる。

次に時期であるが、2号墳のような全長15mクラスの前方後円墳は、美作地方では、鏡野町・赤畠古墳（註10）がある。両者は埴丘測量図及び計測値を比較して見ると非常に良く似ている事がわかる（第4図）。この赤畠古墳は、全長45m、蓋石はあるが埴輪はない。埋葬施設は後円部に木棺直葬と前方部に簡略化した竪穴式石室の2基があり、前者から鏡（船載電虎鏡）、鉄斧、刀子、勾玉、ガラス製小玉、土師器・壺などが出土している。この土師器・壺の特徴などから、成立期の古墳の一つに上げられている。また同地域で最古の古墳とされる鏡野町・郷観音山古墳（前方後円墳、43m、註11）と比べた場合、埋葬施設が竪穴式石室ではなく木棺直葬である点、その他副葬品の特徴などから、郷観音山古墳→赤畠古墳の首長系列が考えられている。これと木墳周辺とを比べた場合、津山市日上地域にある日上天王山古墳（前方後円墳、55m、註1）が最古とされる。最近の調査では後円部から2基の竪穴式石室と2基の箱式石棺が検出されたものの、中心の竪穴式石室は盗掘にあり、副葬品の構成については明瞭でない。そのため、時期的な面の具体的検討はできないが、周辺から出土した土師器・壺の特徴からほぼ最古の部類にはいる古墳として差し支えなかろう。よって、加茂川流域の首長墳の系列は從来どおり日上天王山古墳→近長四ツ塚2号墳を想起する事ができる。以上、本2号墳は埴丘規模の特徴などからこの赤畠古墳とはほぼ同時期と推測される。さらにこの加茂川流域のその後の首長系列としては、正仙塚古墳（前方後円墳、56m、註2）が考えられ、その後は須恵器を伴う日上歎山80号（前方後円墳、31.4m、註12）、井口車塚古墳（帆立て貝形、35m、註3）があるものの、その間がかなり空白期間となっている。そのためこの空白期間の首長系列には断絶とも呼べるべき状況が考えられ（註13）、その後突如として現れた日上歎山80号墳などの前方後円墳は、いずれも全長35m前後と規模が縮小し、さらに小地域ごとにある程度分布し数が増えている状況が伺える。この事からあらゆる面でかなり統制ないしは規制がなされ、その影響が端的に現れているものと推測される。そのため、そこには社会編成の一端が如実に現れ、それが全国レベルの編成に組み込まれている事も予測されるため、今後は周辺地域を含め検討が必要である。

以上、今回の測量調査から本古墳群中の各古墳の規模と位置関係の概略を知ることができた。いずれも出土遺物が知られておらず、時期的な面については定かではないものの、前述した同規模古墳（赤畠古墳）の特徴などから、ある程度の時期的な検討も可能となる。いずれにせよ出土遺物がなく類推の域を脱しないため、これら時期的な面さらには加茂川流域の首長墳の系列関係を含めた社会構造等については今後の課題としたい。

（小郷利幸）

（註1）「日上天王山古墳発掘調査ニュースNo.1・2」日上天王山古墳発掘調査団1994、木青P56~57
参考

（註2）奥哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会1975

（註3）小郷利幸「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会1994

（註4）『津山の文化財』津山市教育委員会1983

（註5）中山俊紀他「オノ峯遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会1985

（中山俊紀「オノ峯古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津山市教育委員会1988

（註6）河本清他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会1975

（註7）小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会1994

（註8）「六ツ塚古墳群・日上歎山古墳群」『津山市文化財調査報告No.4』津山市教育委員会

（註9）平岡正弘「上横野小丸山古墳発掘調査報告」『年報 津山弥生の里第1号』津山弥生の里文化財センター1994

（註10）近藤義郎「赤畠古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986

（註11）梅原末治「美作郷村観音山古墳」『日本古文化研究報告9』日本古文化研究所1938

（註12）今井亮「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻原始・古代』津山市史編さん委員会197

2

（註13）この空白期間のいわゆる首長墳としては、例えば河面丸山1号墳などの方墳が考えられている。

日上天王山古墳発掘調査概要

日上天王山古墳発掘調査団（団長 近藤義郎）

1. 発掘調査の目的

美作地方最古型式の前方後円墳の実態を究明することを目的とする。

2. 調査経過

(1) 調査期間 平成6年3月1日から平成6年5月31日まで

(2) 所在地 岡山県津市日上417-13番地

(3) 経過

事前に実施した電気探査により、後円部中央に南北に主軸をもつと思われる堅穴式石槨の存在が推定されていた。後円部中央部の発掘区のほか、くびれ部から前方部前面にかけて6箇所の、後円部墳丘斜面に2箇所の発掘区を設定し、埋葬主体と墳丘の調査を行った。調査後は、埋戻しを行い、旧状に復旧した。発掘面積約200m²。

3. 調査結果

(1) 墳丘施設

前方部2段築成、後円部3段築成で葺石をもつが、埴輪は認められない。

(2) 内部施設

後円部に合計4つの埋葬施設が発見された。

後円部中央に大きく穿たれた墓道に、南北に主軸をもつ中心石槨が存在する。石槨の寸法は内法で、長さ約4.4m、幅0.8mである。盗掘にあっていて、床面はかなり擾乱されていた。

第2石槨は、中心石槨を埋め土でおおった後に、改めてその北側を掘りくぼめて墓壙をつくり、構築したもので、東西に主軸をもち、平面的には中心石槨と一部が重複する。盗掘や擾乱は受けていなかった。内法で、長さ3.2m、幅0.9mである。

第2石槨の北側に平行して箱式石棺1基が存在する。その他に後円部中央の東寄りに箱式石棺1基が検出されたが、すでに半ば以上が壊れていた。

(3) 出土遺物

中心石槨からは、鐵鏡や鐵斧などの鐵器片數十片が出土したが、盗掘のためいずれも小片となっている。

第2石槨からは、捩文鏡、鐵劍、鐵鏡、鏡が出土した。

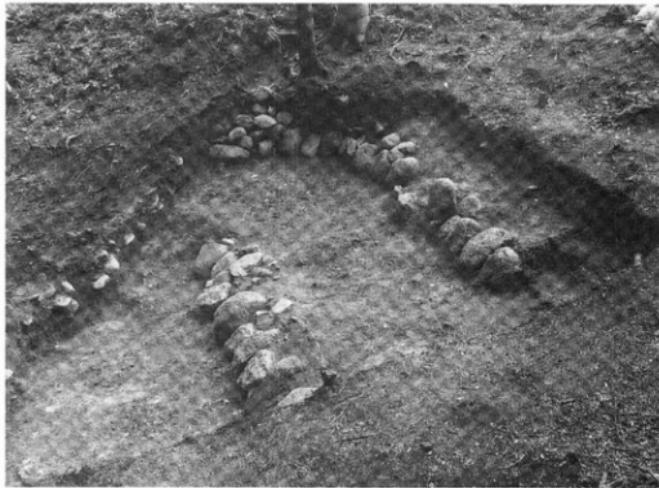
墳丘の調査区のうち、くびれ部に設定した調査区からは、1個体の土師器窓が出土した。他の調査区からも土器片約20片が出土したが、これらには古墳築造以前の劣生土器が多く含まれている。

4. まとめ

今回の調査によって、中心石槨は盗掘にあっていたことが判明したが、調査で検出した遺構と出土遺物は、当初の予想通り出現期の古墳の様相を示すものであり、美作の古式の前方後円墳の実態を知ることができた。今後、墳丘及び埋葬施設の形態と構造、出土遺物の詳細な比較検討を通じて、本地域の前方後円墳時代の成立についての理解を深めることができると考えられる。
(安川豊史)



中心石梯（南から）



くびれ部調査区全景（北から）

2. 資料紹介・研究ノート



堅穴住居と生活単位

中山 俊紀

沼の復元住居を案内していると、この住居に何人ぐらい住んでいたのかという質問を小学生からよく受ける。しかし各住居に何人が住んでいたのかは勿論、どういう人々がどういった住み方をしていただけなど、各人一致した説明のできないのが現状だ。

ところで、発掘調査を担当した近藤義郎先生は、沼遺跡がそうであつただろうように数棟の堅穴住居に住む人々が社会的に基本のまとまりであったと考え、それに単位集団という名称を与えた。津山市の最近の調査でも、堅穴住居数棟がひとまとまりであったのではないかとみられる弥生時代の集落追跡の調査例が増えていて、そのことは確からしい。とすれば、そのそれぞれの堅穴住居相互の関係をはっきりさせれば、当時の人々の生活のありようも見えてくるというものだ。

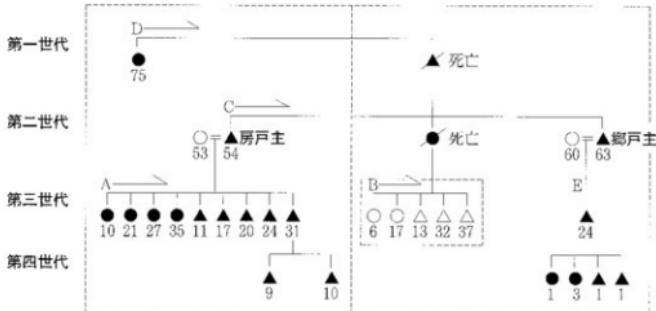
近頃は墓に残された歯の特徴から、墓地で発見された各人骨間の血縁関係を探るなどの注目すべき研究が発表されたり、将来は遺伝子の解析研究などが進むとみられ、墓地追跡から当時の社会構成が復元されてくる可能性はあるが、集落追跡の調査から日常的な弥生時代の人間関係や生活のありようを追及するには、考古学はまだまだ非力である。

この点文献も誰かではあるとはいえ、同時代のものに限れば魏志後人伝唯だ一つという状態で、そのうち家族関係を示す記事は「父母兄弟臥息異處」と「妻子、門戸、宗族」の刑罰単位があったとするのみである。後者から夫婦と子供、もうすこしきな近縁単位、それより大きい単位の血縁集団の存在したことが「宗族」の言葉から推測できるが、前者についてはさまざまな解釈が可能で、具体的に何を書き記しているのかはっきりしない。

ところで奈良時代まで下ると、正倉院文書の戸籍・計帳残簡があって、こういった関係を具体的に示してくれる。それらは奈良時代のものとはいえ、漠然と現在の「常識」から弥生時代の人間関係を考えるよりずっと、具体的な古い時代の家族のイメージを与えてくれる。

たとえば、門脇信二先生著の「日本古代共同体の研究」に掲げられた養老5年（721）造籍の下総国大鷦鷯の孔王部比都自の「郷戸」を見てみよう。

「孔王部比都自」郷戸籍図



*数字は年令。白抜きは家族員権を異にするとみられるもの。

この戸籍から読み取れる特徴をひろいあげると、

1. 戸籍と居住単位が一致しているとすれば、第一世代、第二世代、第三世代ともに兄弟姉妹の関係が同居原理になっている。（A・B・C・Dライン）
2. 子は母方につく場合と、父方につく場合の両者がみられ、第二世代の母子関係および第二世代の結婚適齢期を過ぎた男女の多数のありかた、またAライン31才の男性、Eの24才の男性に対応する妻が入籍されていないことから、夫婦同居・別居の二形態が共存していたことが考えられる。
3. 第四世代の兄弟姉妹に同年の3人が存在するので一夫多妻の存在が推測される。

などがある。

生存者総数は26名で、複数の居住空間に振り分けられるにふさわしい構成であり、戸籍上二戸戸に区別されている。（3単位ぐらいか？）

1に注目し、「親族」の関係が郷戸結合の基本的要素と判断して、より古い時代には「原郷戸の家族」が存在し、村の関係は親族関係を中心に構成されていたとかって考えられたことがあった。そういう見方が正しいとすれば、孔王部比都自の郷戸のようなイメージを堅穴住居数棟の居住者に対応させればよいことになる。

しかし、この説には有力な反論がある。奈良時代の戸籍は租税負担単位を安定して確保するため、一定のモデルに基づき機械的・強引に編成したもので、当時の家族実態を反映したものではないというのである。

さらに、実態を反映したものとみる学者のなかにも、家のありかたはその社会のありかたに大きく左右されるから、この郷戸のありかたは律令社会の強烈な収奪に対抗するための自衛手段として家族編成されたもので、婦女労働力確保が本質の本質であって、夫婦別居もこの延長で理解されるのであり、それは限定された時代の特殊な形態で、伝統的な直系家族の変形であったとみるものがいる。

擬制説については、そういった点が十分考慮されることはいえ、課税の基礎単位が明確な実態を伴っていないものなら機能しうるのかどうかといった疑問が残るし、そもそも編成原理が実態に反する戸籍・計帳が存在しうるとも思えない。

親族集団説、自衛編成説についていえば、兄弟姉妹のラインがもつ血縁組織としての側面をもっと重視すべきように思われる。戸籍に残る「姓」には、苗字に近い意味が当時生じていていると考えられているが、大婦は「別姓」で記される例が多く「同籍」姉妹の子も別姓と判断される戸籍も存在する。このことは、当時の姓のありようからみて「姓」に関する限り明確な父系原理が働いていたとみるべきで、家族と郷戸の構成がオーバーラップの状態にあった（表の黒と白の区分）と評価すべきであって、その点にこそ強烈な税の収奪に対抗した奈良時代の家族の特質があるようと思われる。遅って隋書倭国伝の「同姓不婚」記事と併せ考えれば、大化前代に血縁出自集団がはた日にも明確に知られたのであり、そうすれば奈良時代の家族構成も親族の集団と評価すべきではなく、「大家族」的な兄弟（姉妹）関係に結合原理を求めた変則的な家族集団と評価すべきではなかろうか。

水田開拓期初期にも類似した社会的条件が想定されなくはないので、以上の文献からみるかぎり、美作地方の弥生中期集落遺跡でみられる大小数棟の堅穴住居を単位とする小住居群の構成を、形態的には孔王部比都自の郷戸のような構成から、典型的な大家族の幅のなかで考えてよいということとなろうか。

遺物写真撮影雑感

岩本えり子

復元された土器、鉄器、玉類など遺物一つ一つ写真を写す上で一番気をつけることは最も特徴の出ている所、一番よい顔をしている所を捜すことです。遺物の中では、やはり土器の顔が一番気になります。弥生土器、土師器、などは個性的な顔をもっています。

須恵器の格一化された形は同じように見えますが、よく観察すると色々な顔に見えます。美しく整って完成された顔、ゆがんで苦しそうな顔、どこから写そうかと思うくらい困ってしまう顔、古代の人々の制作時の姿が写るような気がします。よい写真を写して欲しいと言っているよりも思われます。

写す時は底が、ゆがんで不安定な土器は、まっすぐ立たせなくてはなりません。重しを置いたり粘土や消しゴムを切ったものを挟んだりして、安定させます。重しや粘土などが写ってはいけないので変形している土器の場合は、挟んだものが写らないようにする為に時間がかかります。

プロのカメラマンとは違う、素人なりの新鮮な写真が写せないものかと、考えています。それに白黒なので陰影が大事になると思いますが、自然光で写したり、写真室のライトを使ったりして悪戦苦闘、汗ダクで写します。たまにカメラのシャッターが下りなくなったりすると、もしかしてこの土器は写りたくないとか、もっと違う角度から写して欲しいと、言っているように思えたりする時があります。(実際は、カメラがやはり故障していました・・・不思議?)

その遺物は祭祀に使われていたのだろうか、日常使われていたのだろうか、どうしてこんな形に作ったのだろうか、当時の人々が作った形は現在の感覚では中々わかりにくいものがあります。

片目をつぶって何百枚も写することは、目の下にシワの増える私の年令にとって少し気になる所ですが、このような機会を与えて下さったことに感謝すると共に、もっとよい遺物の顔を探し続けて今日もシャッターを切っています。





年報
津山 遺生の里

第2号（平成5年度）

平成7年3月31日

発行 津山市教育委員会

津山遺生の里文化財センター

岡山県津山市沼600-1

印刷 株式会社 三 勝

岡山県津山市高野山西2115-15
